

令和7年（2025）度 第2回 大阪府立西成高等学校 学校運営協議会 議事録

【日 時】 10月18日（土）13：00～15：00

【場 所】 大阪府立西成高等学校 多目的室A

【出席者】
（会長）西田芳正委員（副会長）高見一夫委員 稲田智英委員 榎井縁委員
田中俊英委員 稲嶺一夫委員 堂上勝己委員 村上由紀委員

【内 容】

1. 開会
2. 校長挨拶
3. 議事
 - (1) 令和7年度の取組状況についての報告
 - (2) にしなり学について
 - (3) その他

進路保障室より50期生の進路状況について

4. 閉会

<開会に際して>

山田校長「10月にポルトガルの校長ら5名が視察に来られて意見交換をした。ポルトガルではセカンドチャレンジスクールという学校がドロップアウトし放置されている子どもの解決にむけて取り組んでいるとのこと。また、これまで連携している東京のチャレンジスクール、都立立川緑高等学校から校長先生と先生らが来られ視察をうけた。立川緑高校も本校と同じような目標を掲げて学校づくりをされており、意見交換ができた。校内的には、学習に配慮が必要な生徒の支援プロセスを見る化する必要があると考えていて、教員が互いに研鑽し合う必要があると感じている。結果に対してどう見ていくか、単に勉強ができる・できないではなく、高校生として、あるいは大人としてどういうことができるようになったか、を見取っていく必要がある。」

【事務局からの説明および各委員からの意見等】

（1）令和7年度の取組状況についての報告

<1年 副学年主任より>

- ・入学当初から出席率の高い生徒が多く、転退は現時点で0名であり、よく頑張っている。
- ・行事への出席率が高く、スポーツフェスタ 96%、万博への校外学習 88%、と行事に積極的に関わり楽しもうとしていることがうかがえる。
- ・課題は、夏休み明けごろから、友人間の些細なトラブルから登校しにくくなる生徒が出てきていること。入学当初は張りつめていた気持ちが、徐々に不安定になり、教室に入ると誰かに見られているような気

がして教室に入りにくい生徒もいる。そういう生徒について、スクールカウンセラーとも連携しているところである。西成高校で自分を変えたい、新しいことにチャレンジしたいという思いで入学してきた生徒たちの思いを学年全体で大事にていきたい。

<2年 学年主任より>

- ・学年目標を「いまやる！すぐやる！最後まで！～やってみなはれ～」と設定して、生徒たちがチャレンジすることを後押ししている。
- ・進路実現に向けての意識も高めているところである。
- ・テーマ別人権学習では、「ジェンダー差別」「外国人問題」「部落差別」の3テーマを扱い、各テーマごとに3名の講師を招いて講演会も行っている。
- ・校外学習では、146名中、115名参加し、事後アンケートの肯定率も92.8%と高い数値であった。
- ・スポーツフェスタでは出席が109名と少し少なかったが、参加した生徒からは肯定的な意見が92.7%と多かった。
- ・宿泊研修は、120名が参加予定であり、レクリエーションなどの有志を募集しているところである。昨年度は多くの生徒が有志での発表を希望してくれたので今回も後押ししていきたい。
- ・インターンシップでは、100名の生徒が3日間を通して実習することができた。2月に2回めのインターンシップを予定している。17名程度が参加予定である。
- ・生徒会役員が学年から8名選出されたことは喜ばしいことで、朝の挨拶運動などを頑張っている。

<3年 学年主任より>

- ・進路について、就職希望者の学校斡旋就職（一次）と進学希望者のAO入試等がひと段落ついたところである。現在は学校斡旋就職（二次）にむけて、および、登校状況が不安定な生徒について、卒業にむけての指導にあたっている。
- ・3年になっても遅刻・欠席が多い生徒が一定数おり、その改善にあたっている。
- ・残りの行事が高校生活最後の行事になるので、前向きに取り組ませたい。

(1) の質疑・応答

Q1：委員「2年のインターンシップについて、参加者数は従来に比べて多いのか。」

2年主任「母数がちがうが、割合としては増えている。3日間参加できた生徒は昨年度に比べて多い。」

委員「企業へ実習に行けない生徒には、校内実習をしているとのことだが、どれくらい機能しているのか。」

2年主任「建築希望の生徒は校内で建築の体験実習を行っている。登校状況が不安定で校内実習となった生徒もそれに準ずるようなかたちで校内実習を行っている。足場を組んだり、食堂前のベンチの上に屋根を作ったりしており、前向きに取り組んでいた。生徒の満足度も高い。」

山本教諭（進路）「つなぐ化事業様が、校内実習の様子をHPで公開しているので見ることができる。」

Q2：委員「1年の行事への参加率が例年より高い原因は何だと思うか」

1年副主任「中学で行事参加の経験がなく、行事に期待感をもってくれている。高校で初めてクラスの中心になれている生徒もあり、みんなで盛り上がること自体に楽しみをもってくれていることが要因かと思う。」

委員「静かな生徒も居やすい雰囲気、やわらかい雰囲気があるから、ということもあるのではないか。そのような雰囲気の醸成を、学年の先生方で作られたのではないか。」

山田校長「ステップスクール1年めと2年めで学校の取り組みとして大きく変わったことはないが、入ってくる生徒の雰囲気は変わっている。夏休みが明けて、いじり・いじられという関係が顕在化してトラブルがやっと出てきた印象を受ける。」

委員「トラブルになる時期が例年より少しずれ、なぜ2か月ほど遅れているのでは。となりカフェの様子から、幼い生徒が増えていることが要因ではないかと思う。」

山田校長「今までGWあけに大きなトラブルになることが多い、学校を離れる生徒もでていた。それが夏までに起こり、落ち着いてくる傾向であった。今年はGW明けのトラブル自体がなかった。」

Q3：委員「3年生になって中退になりそうな子が増えているとのことだが、なぜか。この数年で全体の中退率は下がっており、数年前まで1年で多かったはずだが、3年で多くなっているのは、どのような変化か。」

山田校長「1つの見かたとして、1, 2年で中退せずに3年生まで続けてこれた子が比較的多いとも言える。これは進級しやすいシステム的なところと学年団の働きかけによると推測している。現状としては5クラス編成か6クラス編成かの瀬戸際の人数で3年まで来ている。」

委員「3年での課題をもう少し顕在化させて、“3年生問題”をもう少し考えていくれば、中退防止につながるのではないか。」

山田校長「不登校経験や学校嫌いな生徒が多く入学する中、1年生で寄り添いながら登校を定着させることに重点を置き、「ともに学びともに育つ」を意識して教育活動を行っているが、3年生で進路決定し、社会の中に出していくことを考えると急激に厳しいことも言わなくてはならない。その中で厳しくしすぎると学校に来れなくなり、緩めると社会に出てついていけないというジレンマを抱えている。」

委員「認知力に視点を当てた『ケーキの切れない非行少年たち』が流行り、ある学者が境界知能という言葉をつくって、そこにはまる青少年たちを顕在化させてきたという社会

的な風潮がある。生きづらさを抱えた子が1年生で顕在化してきていたものが、だんだん居心地がよくなっているから、3年までは引っ張ることができているが、就職を目前にして生きづらさが表れてきたのではないか。それを見据えて3年生用のプログラムを議論しても良いかもしない。」

委員「いわゆる境界知能にあたる子は、個別性が高いのではないか。何でも発達障がいというカテゴリーに集約されるところが社会にはあるので気をつけないといけない。」

委員「“3年生問題”は、1・2年での取り組みの結果、潜在化していたものが、3年で卒業を目前にして出てきている。3年まで残っているのはある意味で学校の取り組みに成果がでて、成功しているといえる。」

(2) にしなり学について

<教頭より>

にしなり学を開講するにあたって、ステップスクールの特色である「地域と連携」「体験学習」を、どう実現していくのか令和5年度、令和6年度と議論してきた。その結果、にしなり学を開講し、にしなり学設定科目10科目において年間10時間程度以上、地域と結びついた取り組みをすることになっている。

<地域連携事務局より>

地域に学ぶ、地域で学ぶということを念頭において、生徒には2つの目的を伝えている。①生徒自身が学校や地域を好きになる、②地域の課題や魅力を発見し、生徒自身が提案・発信できるようにする、の2点である。加えて、教員向けには、教員にも地域や学校を知って好きになってほしいという目的も伝えてている。

- ・国語科では、『じゃりん子チ工』を題材にして、萩之茶屋周辺にフィールドワークへ行き世界観を知る。
- ・社会科では、西成で増えている海外の飲食店や、海外の商品を扱うお店などを調べたり、実際にモスクへフィールドワークにいく予定である。
- ・数学科では、スーパーなどの値段の違いを調査して、その価格からどんなことが予測・判断されるかを議論している。
- ・理科では、防災に関するを中心として、地域の防災リーダーの方と一緒に街歩きをしたり、津波の石碑などを見学した。簡易ベッド制作などの実習もしている。阿倍野防災センターにも行く予定である。
- ・体育科では、皮革産業のひとつである太鼓づくりについて座学と実技を実施している。地域連携C.o.の寺島さんから太鼓演奏を習い、卒業生にも太鼓の指導を手伝ってもらっている。
- ・芸術科では、西成製靴塾の大山さんを招き、サンダルを10時間かけて制作した。文化祭で展示予定。
- ・英語では、なぜ外国人が西成に来ているのか、旅行者を対象に街頭インタビューを実施した。
- ・家庭科では、食肉産業を扱い、実際に酒井食品様へ行ってお話を聞いた。調理実習では、ホルモン焼きそばや油かすを使ったたこ焼きや焼きそばを作り、ホルモンあり・なし、油かすあり・なしを食べ比べた。予想よりも多くの生徒がホルモンを好んでいた。
- ・情報科では、街歩きをして知ったことをまとめて発信していくという取り組みをしている。

- ・福祉科では、地域の福祉施設の見学や、ゲストティーチャーとして地域のコーヒーショップの方に来ていただき、コーヒーの淹れ方を学ぶなど、地域とのつながりを体験している。
- ・体育科と家庭科、芸術科の3科合同の授業も行った。皮革・食肉産業についての学習として『ある精肉店のはなし』を視聴し、寺島さんからの講演を行った。生徒からも感想の中で自身が部落出身であるというカミングアウトがあったり、一生懸命仕事をしているだけなのに差別されるのはおかしいという意見も出てきた。

年間スケジュールにおいて、月1回の担当者会議を持ち、調整や困りごとの共有などもしている。運営会議では、課題や次年度にむけた検討事項などを議論している。1月には全体発表として全講座の生徒が発表する予定である。にしなりフェスタではそのうち3科目が発表する予定である。

(2) の質疑・応答

Q1：委員「科目の授業とクラブ活動は連動しているのか。」

世良田教諭「特に連動はしていない。工芸製作の授業では、靴づくり部の活動と曜日が重なっているので、授業で作り切れない場合、部活動の時間にも製作できるとは伝えている。」

Q2：委員「教科の授業の中に西成について学ぶ時間があるとのことだが、教育課程の面で問題ないのか」

山田校長「科目を立ちあげたのではなく、学校設定科目として届け出しているものに内容を加えてもらい、シラバスも変更しているので問題はない。」

Q3：委員「年間を通して西成について学ぶのではなく、1年間で10時間以上としたのはなぜか」

山田校長「年間を通して西成に関連付けた教材を準備するのは非常に労力がかかり、教科によってはそこまでの教材が準備できるかどうか担保できなかつたので、最低10時間と設定した。ただし、教科の裁量で1年間、西成に関する教材を扱ってもよいし、10時間でもよいという設定にした。そのため、新着任の先生にも担当してもらえている。」

Q4：委員「教科によって受講者数に偏りはでないのか。」

立石教諭「偏りはある程度出る。受講可能な最大数は設けており、多ければ抽選も行う。多い科目で20名程度、少ない科目では5名程度で授業している。」

Q5：委員「担当者会議と運営会議のちがいとは。」

世良田教諭「担当者会議は授業を担当する教員が集まり、さまざまな調整をしている。運営会議は、担当者から上がってきた課題や次年度にむけて、予算なども検討している。」

Q6：委員「西成区外から入学してくる生徒も増えていると思うが、現段階で生徒はどのように受け止めているのか。」

世良田教諭「生徒アンケートはまだ実施しておらず、運営会議でアンケートの内容を議論中である。先に、芸術科の靴作りの後で取ったアンケートでは、今までの考え方方が変わった

り、西成のイメージがマイナスから、皮革産業ってすごい！というポジティブなものに変わった、授業をうけて西成のことをもっと知りたい、いい町だなと思ったという意見が出てきている。」

Q7：委員「西成高校生が町に飛び込んでいき、お店の人や外国人と交流しているのは、今まで小規模では実施していたかもしれないが、組織的に実施しているということで、地域の評判としてはどうか。」

世良田教諭「酒井商店様には17名ほどの生徒が見学に行ったが、買い物客とも交流が生まれていたので、町の活性化につながっている。」

山田校長「西成の街の人に子どもたちを育ててもらうというねらい通り。町の人にも、がんばってるねと認めてもらったり、もっとこういうこと勉強してほしいというアドバイスももらい、育ててもらうという効果を期待している。」

委員「逆の効果もあり、若い子が来て話をきいてもらえるというのは、地域も元気をもらつてよい効果に繋がる。」

Q8：委員「教職員の反応としてはどうか。」

世良田教諭「肌感覚では、教員もおもしろいと思いながらやっていると思う。この場に授業担当者が2名いるのでそれぞれからもお願ひします。」

林教諭「皮革産業についてはじめて勉強することになった。和太鼓の譜面もよめなかつたが生徒と一緒に解読しているという状況である。生徒のほうが飲み込みが早かったりするので一緒に勉強しているところである。」

立石教諭「先日、『じゃりん子チ工』のDVDを見て、当時の町の雰囲気と、現在との違いであったり、同じような特色を見つけて、フィールドワーク前の下調べを行った。私もテレビで見たことはあったが、生徒と同じように改めて学習をしている。」

世良田教諭「フィールドワークの際に教員で下見にいくが、どのように生徒を連れて行こうかと、わくわくしながら行っている。」

(3) その他

①進路の取り組み及び50期生の進路状況について

- ・1年生では学年全体でアルバイト支援を行っている。アルバイト希望の生徒に、丁寧な聞き取りをしてサポートをしている。
- ・2年生ではインターンシップに70社の事業所が参加してくださった。第2回も実施予定である。アルバイト支援も継続して行っている。
- ・3年生では5月末に仕事理解ガイダンスを実施し、69社に参加していただいた。1,2年も参加できないか検討をしている。
- ・障がい者手帳所持の生徒において、採用実習を受けている5名の中で、1名内定がでている。

- ・進路希望未定の生徒が例年より多い。学年からの話にもあったが、欠席日数が多く、まずは卒業を目指している生徒が多いいためである。これが課題となっている。
- ・就職希望者は43名に内定がでている。9名は不採用となつたが、7名が接客販売希望、2名が飲食希望であった。ほとんどの生徒が二次試験にむけて取り組んでいる。
- ・倉庫、製造業は内定率が高い。人手不足の業種もある。

〈進路保障室からの報告に対する質疑・応答〉

Q1： 委員「去年までと比べて、求人数は変化しているか。」

山本教諭「全体的には多くなっている。職種別で見ると接客販売が増えている印象である。」

Q2： 委員「就職と進学の比率は例年と比べてどうか。」

山本教諭「若干ではあるが、進学が増えている。また、縁故就職を希望する生徒も増えている。」

Q3： 委員「縁故就職の就職先にはどのようなものがあるのか。」

山本教諭「アルバイト先にそのまま就職する、親族の紹介で就職するなどである。」

Q4： 委員「給料は上がっているか」

山本教諭「上がっていると思う。初任給が26、7万円程度の事業所もある。」

Q5： 委員「就職試験未受験の生徒の進路はどうなっていくのか。」

山本教諭「学校斡旋を希望しているが、登校状況等をみると、すぐに斡旋をということがむずかしい生徒である。担任が登校を促して斡旋できるようにしているので、ゆくゆくは就職となる予定。」

〈閉会に際して〉

山田校長「来年度の、ステップスクールの完成年度に際しては、学校運営協議会以外のイベントも考えている。」

以上